慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アダム、スミス略伝並に国富論諸板本に就て
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	三田学会
Publication year	1911
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.5, No.3 (1911. 4) ,p.211(1)- 233(23)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	アダムスミス紀念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19110415-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

とを吝まれざりし田中慶應義塾幹事に對し最深厚なる謝意を表するの甚だ適當なるを信ずるものなり。

明治四十四年三月

三田讀書會幹事

三田學會雜誌　第五卷第三號

アダム、スミス紀念號

アダム、スミス略傳並に國富論諸板本に就て

小泉信三

（一）

實行の世界に名を成した古來幾多の人物が波瀾多く曲折に富める一生を送りしを例とするに反し、學問思想上の歷史に殘る偉人の生涯は、例外は固より之を認めなければならぬとしても、概して平靜にして單調「傳記讀者」を喜ばすに足るが如き事件に乏しきは亦止むを得ざる所である。國富論一卷を殘して經濟學史上に至高の地位を贏ち得たアダム、スミスの生涯は實に此一例である。耳目に珍らしき事實事件を彼の傳說から豫期するものは必ず失望しなければならぬ。アダム

スミスはフランソア、ケネーより遲き事二十九年、同じくジャン、ジヤックルソーに遲るゝ事十一年、イムマヌエル、カントロに先つ事一年卽ち西曆一七二三年六月五日を以て蘇格蘭ファイフシア Fifeshire の一小都市カークカルディー Kirkcaldy に生れた。其名を同じくアダムと呼び、カークカルディー稅關監督官を勤めて居た彼の父は一度其妻を失ひ、後配として更に Douglass 氏の女を娶つた。

アダム、スミスは此結婚に依て生れたる唯一人の子である。然るに父はアダム、スミスが生るゝに先つて世を辭した爲め彼は其母の手一つに依て養育さる可き運命の下に立つ事となつた。而して其父が官吏として受くる所の俸給は年額四十磅――其他に多少の收入はあつたのではあるが――であつたと傳へらるゝに由て觀れば、其家は決して富裕なりと云ふ事は出來なかつたのである。此る事情の下に人となつたスミスは幼にして異常の天禀を示し、殊に其記憶力の强盛は屢々人を驚かしたと傳へられてある。斯くの如くにしてカークカルディー小學校に於ける其學業の進步は最も急速なるものであつた。一七三七年グラスゴー大學に入り、好んで數學、自然哲學(理學)を修めたが同じく好成績を得、是が爲めに「スネル奬學資金」Snell Exhibition 選拔學生として一八四〇年オックスフォード大學バリオルカレッヂに進む事となつた。オックスフォードに於ては主として倫理政治の學を修め、居る事七年にして一八四六年鄕里カークカルディーに歸り、其後二年を母と共に住んだ。

アダム、スミスは元來勤勉なる學生ではあつたが、其將來の生涯に關しては別に確定した計畫を有つて居なかつた。兎に角始めは英國敎會の僧侶となるつもりであつたが此志望は何時しか變じて、遂に大學の敎職に就く事となつたのである。一八四八年來彼はケームス卿 Lord Kames 保護の下にエヂンバラ大學に修辭學、美文學を講じ、一八五〇年より五一年に亙る學期には經濟學に關する講義をも演述し、大に學生の好評を博した。彼の先輩にして終生の親友なるダヂッドヒユームを得たのも亦此頃の事である。

エヂンバラ大學に於ける講義の好評は更に一八五一年グラスゴー大學をして其論理學講座擔當の爲めにスミスを招聘するに至らしめ、次で翌年敎授トーマスクレイギー Thomas Caraigie の病死するやスミスは其後任として道德哲學 Moral P

hilosophy 教授に擧げられた。由來蘇格蘭大學の慣習は道德哲學中の一部として經濟學を講義するの常であつたが、スミスも亦此例に漏れず、後年國富論に於て發表した學說の骨子となる可き部分を此道德哲學講座に於て演述したのである。當時グラスゴー大學々生としてスミスの講筵に列した John Millar の云ふ所に從へば、スミスの講義道德哲學講座に於ける主題は四つに分つ事が出來る。第一部は自然神學「第二部は狹義に於ける所謂倫理學で主として後年道德情操論に於て公表した學說を以て成立つて居り」「第三部に於ては道德中正義 Justice に關する部分門を論じ……彼(スミス)はセンテスキユーの方案(プラン)に從て原始時代より文明時代に至る法律學の發達を辿り、財產の存立蓄積を助くる技術の之に適應する法律並に政府の改良變更に及ぼす效果を指摘するに力めた。而して講義の最後の部分卽ち第四部に於てアダム、スミスは國富力及び國家の繁榮の增進を目的とし正義に非ずして便宜の原則に基づく國家の制規 Political Regulation を研究し、此見解を以て商業、財政及び宗教上、軍事上の設備に關する諸制度を考案した。而して「此題目に就いては彼が講述した所は彼が後年 An Inquiry into the nature and Causes of Wealth of Nations なる表題の下に發表した著書の要旨を包含して居つた」のである。

スミスの講義は奔放自在を極めて莊重閑雅と稱する事は出來ぬが、明晰にして卒直、最も學生の喜び聽く所となつた爲め「スミス先生の倫理哲學」は屢々グラスゴー社交界の話題に上つた。彼は又屢々グラスゴーの商工業者と接觸して其實際上の智識を豐富にしたと傳へられてある。國富論全卷を通じて隨處に引用せらるゝ饒多なる實例は此間に得たものが尠くない。一方に於てアダム、スミスは着着として其倫理學說の完成に力め、一七五九年彼の「道德情操論 Theory of Moral Sentiments を公にし、彼の文名は之より一時に高くなつた。一七六二年グラスゴー大學は彼に贈るに法學博士の學位を以てした。

かゝる中にアダム、スミスのグラスゴー時代は漸く終りに近づいた。一七六三年の末スミスは青年貴族バックルー公爵 Duke of Buccleugh に師傅して其大陸旅行に同伴す可き招ぎを受け、之に應じて一七六四年の始めグラスゴー大學教授を辭し、同年二月海峽を越えて大陸に渡り、一七六六年に至つて再び英吉利に歸つた。此旅行は經濟學史の研究者がスミスの生涯中最も注意す可きものと認むる事件の

6

一である。彼は此旅行中、始めツールーズ Toulouse に停る事一年半、次で南部佛蘭西、西部瑞西を歴遊した後一七六五年巴里に來て、此處に滯在する事九個月に及び親しく佛蘭西の産業、財政、行政の實狀を觀察し得た許りでなく巴里滯在中はバッックルー公爵の地位と、親友ヒュームの紹介と、並にスミス自身の文名とに依て佛蘭西學界文界の大家殊にケネー、チュルゴーを始め所謂佛國フヰジオクラットの諸學者と接觸交際して大に其影響を受くる所があつた。アダム、スミスは實に國富論をケネーに獻ずる計畫であつたと傳へられて居る(國富論中の「年生産」なる觀念第一篇代價論の中に説かれて居る分配論、第二篇の資本不生産的勞働の學説等が此大陸旅行に依つて得られたるものならんとの推斷の理由は後論に讓る)英吉利歸國後のスミスは母と共に專らカークカルディーに退いて大作國富論の著述に從事し、一七七三年其原稿を携へて倫敦に出で、一七七六年三月九日、同じく倫敦で An Inquiry into the Nature and Causes of Wealth of Nofions なる表題の下に之を公にした。ルソーの民約論 Du Contrat Social on Principes du Droit Politique 出でゝ十四年、カントの純粹理性批評 Kritik der Reinen Vernunft に先つ事正に五年である。國富論一度現はれて其學者の思想の上に及ぼし、政治家の政策の上に及ぼした影響は實に目覺ましいものと云はねばならぬ。スミスと同時代なるウイリアム、ピットは國富論を熟讀反覆して能く之を理解する事著者自身に劣らずとアダム、スミスをして云はしめた程である。十九世紀に於ける經濟上の自由運動は悉く國富論の所説を信仰個條として其頭に戴いた。國富論は實に著者自ら豫想する事を愚なりとした「ユートピア」をすら建設する事が出來た。吾人は此書が國民經濟上に及ぼした影響を一々細叙する暇を持たぬ。只「國富論の效果は驚く可きものあり。英吉利の凡ての人の生活は之れが爲めに一變し、改善せられたり」と云ふバジオットの言の必しも誇張でない事を斷吉するに止めて置く。此くの如き著大な影響を經濟上の實際に及ぼした他方に於て一科の學としての經濟學は又國富論の出現に依つて初めて確實なる基礎の上に置かれたのである。固よりアダム、スミスの説く所は悉く前人未發の眞理ではなく其本源に遡れば或はヒュームありハッチェソンありマンデヴィルありケネーあり又チュルゴーがある。併し乍らアダム、スミスの頭腦の大は悉く之等前人の所説を包容して毫も之が爲めに煩はさるゝ事なく之を純化し綜合し

て新に自家の體系(システム)を建設し、爾後の經濟學の爲めに滾々として汲めども盡きざる源泉を供給する事が出來たのである。此くの如くにしてリカードも出たミルも出た。他の一方にはスミスの勞働價値說から出發したカール、マルクスも現はれた。而して曾てスミスが一度論究した古き問題は猶今日の經濟學に依て屢々繰返して新に討議されて居る。例へば彼の分業論、自然價格論、資本論、利潤論の如き、又國富論第一篇第八章が勞銀と勞働效程との關係に就き最新研究の結果を豫言して居ると云ふが如き、帝國主義者と自由貿易論者が各國富論の或部分の章句を引用し、註解して自分の議論を强めやうと力めるが如き、又財政學者が所謂租稅四原則を解剖してスミスが負擔能力說を取つたか、或は國家利益說を奉じたかを爭ふが如きは僅かに其二三例に過ぎないのである。併し乍ら經濟學說の沿革を述べスミスの所說と今日の經濟學とを比較するのは吾々の目的ではない。吾人は既に路に走つて餘りに多くを語つた。吾人は再び元に歸つて、國富論出版以後のアダム、スミスを略述しなければならぬ。

國富論出版後の二年間をアダム、スミスは倫敦で送つた。一七七八年スコットラ

ンド稅關委員の一人に擧げられてエヂンバラに移り遂に其死に到る迄此處に住んだ。此頃のアダム、スミスの收入の事が或本に載つて居るのを見ると彼は稅關委員として年俸五百磅、鹽稅行政官として一百磅、バックルー公爵家より年金三百磅、卽ち合計一年九百磅を得て居つたと記してある。前に述べた父のアダムの四十磅に比べると遙に富裕であると云はなければならぬ。一七八七年其母校グラスゴー大學の總長に選ばれたが、三年の後遂に病を以て世を辭した、一七九〇年七月十七日。年を享くる事六十七であつた。死の前數日彼は友人Riddellに向て自ら成し遂げた事業の甚だ乏しきを悔んだと傳へられて居る。スミスは遂に娶らず母及び曾て戀人たりし從妹Jane Douglassと共に棲んで世を終へたのである。

アダム、スミスの企てた計畫は決して道德情操論及び國富論で終つて居るものではない。彼は實に倫理學、政治學の全體に亘る理論的歷史的研究を完成しやうと試みたので、公表された二著は僅に其の一斑に過ぎないのである。此計畫は一七五九年道德情操論を發表した時既に抱懷して居たので、先づ此著に依て其計畫した研究の一部を發表し、自餘の部分は到底同一書中に收める事は出來難いから

「……更に他の著述に於て法律及び政府に關する一般原則及び啻に正義に關してのみならず警察、收入軍備並びに其他法律の目的物たる諸般の事項との關係に於ける……其變革(一般原則の變革)の研究に力むる所あらん」と公約した。(道德情操論未節然るに之より後に至つて發表された國富論は右に謂ふ警察、收入軍備に關する研究を包含するに過ぎぬから從て此外に猶「正義に關する研究」即ちグラスゴー大學講義の第三部に相當する部分が發表されずに殘つて居た事になる。而してスミスは猶此外に一種の文明史とも名く可きものゝ著述を計畫して居た。即ち一七八五年十一月、スミスは自ら下の如く記して居る。曰く「余は又他の二大著作を準備しつゝあり。其一は文學、哲學、詩歌雄辯の凡ての部門に亘る一種の哲學的歴史なり」と。而して「二大著作」の他の一は「法律及び政府に關する理論及び歴史」即ち右に述べた「發表されずに殘つて居た……正義に關する研究」である。然るにアダムスミスは遂に之れ等の原稿を自分の滿足を得る程に充分整理する事が出來なかつた。而してアダム、スミスの性情は斯くの如き不完全な原稿を其の儘に殘して之れを後人に示す事を忍ぶ事が出來なかつた。死の十數日前彼は其友人に己の死後必ず其原稿を悉く燒き棄てゝ呉れる樣にと賴んだが之れ丈けでは氣が濟まず、數日の後更に友人を促して直ちに自分の眼の前で之れを火中に投じさせ漸く安心する事が出來たと傳へられてある。此くの如くにして後世は國富論道德情操論及び其他二三篇の論文を除くの外アダム、スミスの著作に接する事を許されざるの遺憾を忍ばねばならぬ事となつた。此遺憾を幾部分小口にするものはLectures on Justice, Police Revenue and Arms, delivered in the University of Glasgow, by ADAM SMITH, reported by a Student in 1763の出版(一八九六年)である。(之はアダム、スミスのグラスゴー大學に於ける講義の筆記を英吉利の經濟學者エドウィン、キアナン氏が發見し之に校訂を加へて出版したもので、講義の年代は「恐らく一七六三年頃と推測される。少くも一七六〇年以後だと云ふ事丈けは確實である。」吾人は今日之に依てアダム、スミスが遂に發表する事なくして終つた法律學の内容を窺ひ得ると同時に、國富論に於て發表されたスミスの思想が如何なる經路順序を經て發達したのであつたかに就て最も興味と實益とに富む研究を進める事が出來る事となつた。後代のスミス研究者は此恩惠に對し深くキアナンの勞と、キアナン

氏に感謝の講義筆記とを與へたマコノキー Maconochie 氏とに感謝しなければならぬ。

アダムスミスの著作目錄は次の如きものである。

(一) William Hamilton of Bangour の詩集 Poems on several occasions に對する序文。日付一七四八年十二月二十一日グラスゴー。

(二) Edinburgh Review に對する寄稿二篇。一七五五年(A review of Johonson'o English Dictionary)並に一七五六年(A letter to the authors of the Edinburgh Review)

(三) 一七五五年の頃スミスは一文を草して剽窃の非難に答へ貿易自由の學說はグラスゴーに於て始めて講述せるに非ずして既に一七四九年エヂンバラに於ける講座に於て之を試みたる旨を說明せり。

(四) Essays on Philosophical Subjects, by the late A, Smith L. L. D., Fellow of Royal Societies of London and Edinburgh, etc., to which is prefixed an Accunt of the Life and the Writings of the Author by Dugald Stewart, F. R. S. E. (London, Cadell and Davies ; Edinburgh, Creech)1795 之れ Dr. Black 及び Dr. Hutton の出版に係り收錄されたる論文は

(A) Principles which lead and direct philosophical inquiries, illustrated by the History of Astronomy(Written before 1758)

(B) Principles which lead and direct philosophical Enquiries, illustrated by the History of ancient Physics

(C) Principles which lead and direct philosophical Enquiries, illustrated by the History of ancient Logics and Metaphysics

(D) Of the nature of imitation which takes place in what are called the Imitative Arts (一七四八—四九年エヂンバラに於ける講義より取れるものならん)

(E) Of the Affinity between certain English and Italian verses.

(F) Of the external senses (唯一の心理學的論文也)

(五) The Theory of Moral Sentiments (Millar, London., Kinnaird and Bell, Edinburgh) 初版一七五九年。二版一七六一年。(A dissertation on the origins of Languages を增補す)三版一七六七年。四版一七七四年。五版一七八一年。六版一七九〇年。(六版に到り始めて其標題の The Theory of moral Sentiments, or an Essay towards an Analysis of the Pr-

inciples by which Men naturally judge concerning the Conduct and Character first of their Neighbors and Afterwards of Themselves. To which is added A Dissertation on the Origin of Languages と擴張せられたるに止まらず、其本文に於ても多くの變更の加へられたるを見る)

(六) An Inquiry into the Nature and Causes of Wealth of Nations.

(七) The Life of David Hume, Esq., written by himself, Londos, 1777. に載せたる "Letter to William Strahan Esq. 日付は一七七六年十一月九日

(八) アダム、スミスの人に寄せたる書簡。Dugald Stewart, Sir Iohn Sinclair, Hill Burton, M'Culloch, Dr. Birkbeck Hill 等に依て印刷せらる。並に Life of Kames, Life of Oswald, スミス書齋目錄等に就て窺ふ可し。

(九) Lectures on Justice, Police, Renevnue and Arms, delivered in the University of Glasgow, reported by a sludent in 1763, and edited with an introduction and notes by Edwin Cannan, 1896.

アダム、スミスの全集には Dugald Stewart の出版に係る The Works of Adam Smith London. 1811—12 がある其第一卷は道德情操論、第二第三第四卷は國富論、及び索引第

五卷は言語構成論、論文、傳記並に Edinburgh Review への寄稿二篇を收錄して居る。

以上吾人は既にアダム、スミス傳記の大略を描いた。次に少しく國富論の諸版本に就て記述する所がなければならぬ。然じ乍ら之を爲すに先つて國富論に現はれたる經濟學說と國富論以前に於けるスミスの經濟學說とを比較對照するは決して興味なき業ではない。而して之を爲すに屈强の材料を供給するものは既に記した Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms, etc であつて此講義の Part II, Of Police; Part III, Of Revenue: Part IV, Of Arms は實に國富論の前身と見る事が出來る。(何故に警察論軍備論等の表題の下に經濟論を講じたかの理由の說明は省略する)併し乍ら今國富論と此講義との結構の詳細を叙べて之を比較對照するは餘りに記事を長くするの嫌がある。吾々は直ちに進んで國富論と此講義との間に存する最も重要なる相違の點を擧ぐる丈けで滿足しなければならぬ。

國富論と講義との間に存する相違の點としては、國富論第四篇末章のフィジオクラチックシステム論、第四篇第七章殖民地論等の新に附加せられた事、講義中に見出し得る株式賣買及び Mississippi scheme に關する記事の取除かれた事等を數へる事。

が出來る。然し乍ら經濟學史の研究者に取て最も重要なるは國富論第二篇の資本論及び不生産的勞働の學説、第一篇代價論中に分配論を挿入したる事、並びに「年生産」Annual produce の概念を力説した事實に如くものはない。此變更は恐らくフィジオクラート諸學者の影響に歸す可きものであらう。固より之に對しては其論據の强固ならざるを指摘する反駁がないでもないが、既に吾々はアダム、スミスの傳記に依て「講義」時代と國富論時代との間に彼の大陸旅行、從て佛國學者との接觸なる事件の介在する事を知り、而して右に述べた諸説が講義にはなくして國富論の中に見出す事が出來ると云ふ事實のある以上、之をフィジオクラットの影響に歸す可きものと推測するのは必しも妄斷とは云ひ難いと思ふ。フィジオクラット學派の信條はケネーの Tableau Economique に具體されて居る。此書中、今吾々が注意を要するのは、(一)「タブロー エコノミック」は一國の全年生産又は年再生産なる概念を含むと(二)或勞働は不生産的なると並に年生産を維持せんが爲めには或「前拂ひ」(佛蘭西語にて "Avances")を必要とし、而して此年生産は分配さるゝものなりと教ふること の二點である。スミスは其自ら云へる如くタブローエコノミックの細目に就ては

左までの價値を認めなかつたけれども、其主要觀念を取て之をグラスゴー時代の學説に適合せしめやうと力めたのは事實である。即ち彼は年生産の概念を採用して彼の「國富」Wealth of a nation なる名辭を此意義に於て使用し(尤も彼が屢々誤て此用語の約束に違背した事實は特記して置く必要がある)又不生産的勞働に關しては家僕並に更に進んで傭主の貨幣獲得以外の目的に使役された勞働は凡て此種に屬するものと論じた。又彼は勞働の生産的不生産的なる區別とフィジオクラトの Avances の學説とを多少混同して終に一國資本の總額は有要生産的勞働者の數を決定すとの見解に到着した。又彼は代價並に其組成分子論中に於て貨物の代價は勞銀、地代、利潤の三に分たれ、同樣に一國全生産は地主、資本家、勞働者の間に分配される事を説明したのである。之れ以上長々しく國富論と其前身との比較研究に從事する事は此小文章の目的でない。吾々は今や進んで國富論の諸版本に就て簡單なる記述を試みる可き場合に立到つた。

國富論はアダム、スミス生前に版を重ぬる事五版に及んだ。其第一版は既述の如く一七七六年三月九日上下二卷を以て倫敦の書肆 Strahan and Cadell から現は

れ(上卷は第一第二第三篇より成り、頁數五一〇、下卷は五八七頁、第四第五兩篇を收む)前グラスゴー大學道德哲學教授法學博士、學士會員アダム、スミス著と銘し、上卷卷頭に總目次を揭げ、價格は一磅十六志であつた。

第二版は一七七八年の始めに出版された。其外形は前版と多く異なる所なく、頁數も大體前と同じで只目次を二卷に分ちて附する事とした丈けの相違である。併し乍ら內容に就て見ると二版が一版と違ふ點は決して尠くない。其大部分は勿論語句の修正に止るけれども猶脚註(フットノート)の多くは此版に到つて初めて現はれ、事實數字の訂正せられ附け加へられたものも諸處に見出す事が出來る。又利潤、地代の發生に關する學說の中變更されたものがあるのは頗る興味ある事實である。其他枝葉の相違に就ては一々詳叙するの煩を厭ふ。價正に二磅二志。

三卷より成る、第三版(一卷は第二篇第二章終まで、二卷は第四篇第八章終まで)は一〇八四年の終に公刊せられ著者の肩書には更に「蘇格蘭稅關委員」と附加へられた。第三版を取て之を第二版に比較するときは重要なる增補の加へられたものがある。卽ち「マーカンタイル、システムの結論」と題する一章、商業の特殊部門の便宜の爲め必要なる公共事業並に公共設備に就て」の一節第四篇第三章中對佛貿易制限の不合理を論じ、第四篇第四章の始めに於て諸種の戾稅を詳述し、鰊漁業奬勵金、穀物奬勵金を論ずる等の條々は第三版に於ける新增補であつて、スミスは舊版を購つた人の爲め、特に書肆に命じて之等の增補及び其他の小增補小訂正を "Additios" and Corrections to the 1st and 2nd Editons of Dr. Adam Smith's Wealch of Nations" として別に印刷せしめた。此外に特に注意す可きは長き索引(インデックス)の添付された事である。但し此索引は(少くも其全部)はスミス自身の手に成つたものでないと推測す可き理由のある事を特記して置く。

一七八六年に出た第四版は體裁頁數全く第三版に同じく、其內容の變更は些細にして殆ど云ふに足らぬ。第五版は著者易簀の前年、卽ち一七八九年を以て現はれた。內容は前版と變る所はない、只前版に於ける誤植を正し(同時に新しい誤植が輸入された)文法の誤りを正した)ばかりである。此外に版權を侵害して第四版第五版を剽竊した Dublin editions がある。一七八五年並に一七九三年に出版されたれも二卷より成るものである。

20　今第六版以後の年代を列記して見ると、第六版一七九一年。七版一七九三年。八版一七九六年。九版一七九九年。十版一八〇二年。十一版一八〇五年。十二版一八一二年。同新版一八七〇年となる。右の中第十一版に到て W. Playfair のスミス略傳緒論評註を添付する事となつた。

此外の諸版の主なるものを數へると、

Wealth of Nations, edited with notes and additions by **David Buchanan** Edinburgh 1814—17.

Wealth of Nations,edited with life, introduction, notes, and supplement, by **J. R. M'culloch,** 1828, 1838 1850, 1855, 1861, 1863, 1889,

Wealth of Nations, edited by **Thorold Rogers** 1869

Wealth of Nations, with introductory essby and notes by **J. S. Nicholson,** London, and Edinburgh 1884.

Wealth of Nations, with notes, and introduetion by **E. B. Bax,** London, 1890

Wealth of Nations, edited with an introduction, notes, marginal summary and an enlarged index,—

by **Edwin Cannan,** London 1904.

（右の中キャナン版は出版最も新しく校訂註解頗る丁寧にして殊に其欄外摘要は讀者に便利を與ふる事最も大なるものあり）

其他抄本解說の類には、

Joyce (Jeremiah,) A complete Analysis or Abridgement, Cambridge 1797（數版を重ぬ）

W. P. Emerton, Analysis of the First Two Books 1877.

J. W. Ashley, Select chapters of W. N., London and New york,:1895. 等がある。

次に國富論の外國譯の年代並に譯者を列記すれば佛蘭西語

Abbé J. L. Blavet, Yverdun, 1781 ; Paris, 1788, 1801

J. A. Roucher et Condorcet, Paris, 1790

Germain Gernier, Paris 1802 5th ed., 1880.

（之れ佛蘭西に於ける最良譯にして、有名なる國富論研究便法並に詳細なる註解索引を添附す此研究法を英譯し之を添附して出版せる國富論版本頗る多し

21　獨逸語

Joh. Fried. Schiller, Leepzig, 1776—78

Christian Garve u. August Dörrien, Breslau 1794—96, 3, Aufl., 1810.

Max. Stirner, 1846—47

C. W. Asher, Stuttgart, 1861

F. Stöpel, Berlin 1878

Löwenthal, Berlin 1882

此外伊太利譯(Naples, 1790: Turin, 1850)丁抹譯(F. Dräbye, Coppenhagen, 1779—80)西班牙譯(José Alonzo Artiz, Madrid 1794)露譯(Poliatowsky, St. Petersburg, 1802)あり。日本には石川映作嵯峨正作共譯富國論(明治四十三年)がある。が後者は全譯でなくアッシュレーの抜萃本に據つたものである。(了)

附　言

此小文を草し終つた後で慶應義塾書館近著の國富論原本並に其他の珍貴なる飜刻本を見て、本文に多少の增補と訂正を加へる必要を發見した。國富論初版の出た年卽ち一七七六年に早くも Dublin に於て飜刻本(版權侵害?)の現はれた

事實の知きは此記事を書くに、就て參考した本には發見する事の出來なかつた新知識である。